



ご家族と房美さん(前列左)

主は私に永遠の命を与えられた

村上房美

この度の私の病気のことなどで、友人、知人、親族等、多くの方々からメールやお手紙等の励ましを頂きました。私の家族の為にもお祈り下さっている多くの集いの皆様にも、心より感謝とともに御礼申し上げます。私は現在自宅で、主に夫の誠、また子供たちの協力の元、いつも共に居てくださる主イエス様に守られて平安のうちに過ごさせて頂いております。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

(1テサロニケ 5:16-18)

私の毎日欠かせないお薬は「恐れるな。心配するな。思い煩うな。」とのベックさんが以前に語っておられた励ましのことばです。

肺腺癌がみつかった当時(二〇一八年九月)、このよ

ノアは、主の心になつていた。

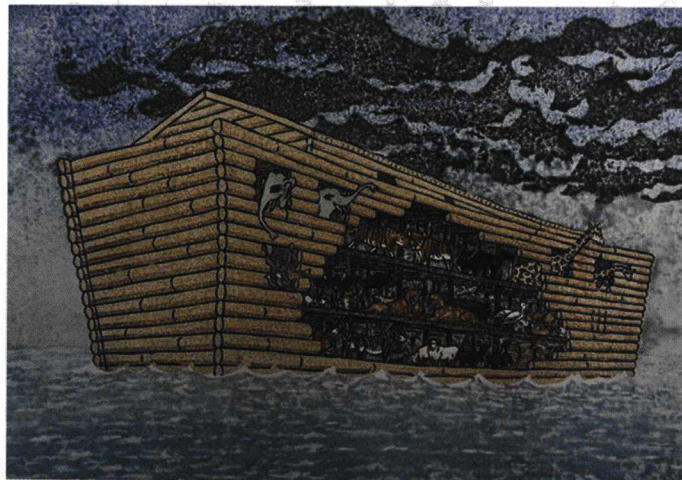
水は、百五十日間、地の上にふえ続けた。

創世記 6:8、7:24

私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいます。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。

1ヨハネ 5:20

今は恵みの時、今は救いの日です。 2コリント 6:2



うな日々を過ごすことができるようになるとは想像もできない程、私の病状は深刻なものでした。

(ヨハネ 14:3)

私のイエス様との出会い、救いについて

私は祖父母の元で育ちました。物心ついたある日のこと、「軍艦に乗っていた父は戦死したのだ」と聞かされました。

祖父母はとても愛情深く私を育ててくれました。いつしか、祖父母が死ぬかも知れないという恐怖は、日々、私を脅かす大問題となっていました。眠っている祖父母の胸元に耳をあてて、息をしているのを確認することがしばしばあった子供時代のことを、今はつきりと覚えています。

子供ながら人一倍死への恐怖心が強かった私を、イエス様はあわれんで下さいました。

わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また

はや私ではなくて、私のうちに住む罪です。

(ローマ 7:15、19、20)

もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(1ヨハネ 1:9)

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

(ローマ 6:23)

新たな悔い改め

二〇一八年九月、私は肺腺癌で、脊髄などの他の骨にも転移しているステージ4との診断を受けました。

脊髄に転移しているがん細胞が神経を圧迫していて、神経麻痺による歩行困難など、いつどのような事態が起きてもおかしくないとの説明を医師より受けました。

来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもちこめるためです。

「神様のご用意くださる天国があるのだ。死は終わりではない」と、希望の光が私の心に差し込みました。

私は一九八四年に吉祥寺キリスト集会へ導かれまし。集会に導かれた当時のこと等については、キリスト集会の証し集「光よあれ 第5集」で証しさせて頂きました。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。...

私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、も

家族揃っての医師との面談の場で、病状がかなり深刻であることを告げられ、「これからの治療方法はどのようにしたいですか?」という医師の質問が終わるや否や「ホスピスに行きます!」と言いました。——イエス様に聞かないで!!

その日の夜、私が即答した直後の家族の顔が目につくか、それらが頭を離れず、病室のベッドにじつと座り込んでいました。その時、主イエス様は私に次のみことばを語られました。

あなたが繁栄していたときに、わたしはあなたに語りかけたが、あなたは『私は聞かない。』と言った。わたしの声に聞き従わないということ、これが、若いころからのあなたの生き方だった。

(エレミヤ 22:21)

私には主イエス様に相談(祈ること)なく、これまで自分で決めて勝手に行ってきたことがありました。

7人の証し

Unser Herr lebt

私は長崎県出身で被爆者手帳を持っております。被爆者に送付されてくる健康診断、定期健診の受診案内それら全てに、ある時期から一切関わらず過ごしてまいりました。

私が小学生の頃、被爆者手帳所持者は当時、定期的に血液検査や他の検査などを学校で受けるのが定例行事でした。ある日のこと、「被爆者はモルモットなのだ」という言葉を耳にしたことがあり、私は子供ながらに衝撃を受けました。

大人になってから「モルモットはいやだ！被爆者の検査、健康診断はもう受けない！」と固く決心し、七十三歳までその頑な姿勢を続けてきてしまいました。

ですから私はこれまでに、少々具合が悪くても病院には極力行かず、薬も飲まず、かつて子供の「お母さん、病院に行ったら？」という言葉にも耳をかさずにきました。夫は「お母さんは行かないと言ったら、絶対に行

かないから……」と口癖のように言っていました。

病状の深刻さにやむなく緊急入院した日の病室で、「家族に随分と不自由な思いをさせてしまっていたんだなあ……」と改めて気が付かされました。

被爆者手帳に関することについて、主イエス様にどうするべきか今まで折ったことはありませんでした。一度も！頑ななまでの私の、主に聞かないで自己判断、自己決定するという罪。主イエス様を知って歩む道と、自分で判断し決めて歩む道。私のうちにある闇を主がはつきりと示されました。自責の念と、取り返しのないこれまでの私の歩んできた歲月……どうしよう……！すると、主は答えてくださいました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたし

を呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。

(エレミヤ 29:11~13)

途方に暮れてしまつて、「イエス様、助けて下さい」という悲痛なまでの私の叫びに、主は語ってくださいました。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

(イザヤ 1:18)

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

(イザヤ 43:25)

主よ、感謝します。

赦しと解放

差し入れて頂いたキリスト集会の証し集「主は生きておられる」13号を通して、主は私に語り、励まして下さいました。

「突然行き詰り、自分が間違つた道を走つて来たと認めざるを得なくなる日が来るかもしれません。なぜそうなるのか。それは主を見上げ、主の導きを祈り、求めることを第一として生きてこなかったからなのです。私たちのすることには、何の価値もありません。主のご目的は、私の中に、また私を通して主がご栄光を受けられることです。私たちに何が起きようとも、それはどうでもよいことなのです。自分の力により頼むのではなく、主のみこころを尋ね求めるならば、主は必ず働いてくださいます。」

以上、ベック宣教師メッセージより抜粋

湧き上がる喜びと平安が私を支配しました。その時ささげた次の祈りを忘れることが出来ません。

「これからは私自身の病気について、身体の特ナンスは医師にお任せします。主よ、あなた様のことだけ思っていたのです。全てお任せします。導いて下さい。何も自分からはしません。自分で考えたり、思ったり、計画することを放棄します。憐れんで助け導いて下さい。」

翌日からは、肉体の痛みや苦しみもなく守られるなかで、主イエス様が満ち満ちておられることを実感しました。昨晩とは打って変わった病室での日々の幕開けでした。

毎朝目覚めと同時に、イエス様との対話で一日が始まります。「今日この病室に訪れて下さる人々に、主の恵みと祝福がありますように。主イエス様、どなた

が訪れて下さるかを、あなた様がお導きお決め下さい。お任せします。この部屋をあなたの栄光で輝かせて下さい。」

病室に溢れるばかりの人々を主は連日招いて下さいました。いつも病室を去られる人々のお顔は輝いていました。「主よ、ここにいて下さったのですね！御名をほめたたえます。」

これまでのベ二百人近くの人々（集会の皆さん、友人、知人、親戚）が病室を訪れて下さり、イエス様をお伝えし、祈ってきました。

こうした大勢の見舞いの方々を温かく受け入れて下さった病院のスタッフの方々にも、心から感謝するばかりです。

入院中にはイエス様に祈りながら、集会の冊子やみことばカードなどをその日に部屋を訪れてくださる医師、看護師、理学療法士、部屋のお掃除の方々にお渡しすることも、主が導いて下さいました。

村上 房美（むらかみ ふさみ）

1945年生まれ

長崎県出身、町田市在住

夫 誠（まこと）

長男 元茂（もとしげ）

長男の妻 華子（はなこ）

孫 元誠（もとなり） 元悠（もとはる）

長女 真由（まゆ）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒 16:31）

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。（1テサロニケ 4:16-17）



主よ、あなたはいつさいのことを ご存じです

竹田 竹子



私は昭和二年一月、今の東京都港区で生まれました。私の戸籍簿には母の名のみが記され、父の欄は空白です。母と私との続柄の所には、私生児と書かれています。今から百年近く前の日本の社会です。さらにずばりの差別用語もあり、そう呼ばれる子どもたちは今の時代からは想像できない侮蔑の目で見られ、実生活でも何かと不利益をこうむりました。

例えば入試の際、学科は合格でも家庭調査で落とされた等はよく聞く実話でした。その不運をさけるため、出生時に「うそ」の届け出をすることも行なわれていたようですが、形の上の策だけでは覆いきれない心の問題は、痛みを伴って長く残ってしまいます。

一度も会ったことのない私の異母妹は、「祖父父母」つまり実母の両親の子として届けられ戸籍簿はととのっていたのに、大学卒業直後、自ら命を絶つたそうです。よほどの何か辛い体験があったにちがいないかもしれません。私の母は、多額の金銭で父に買われた間柄だったよう

です。

「父はどこかで生活している」と気付きましたが、十歳頃までは、会ったことがありません。周囲の大人たちのひそひそ話などから、自分はふつうの家庭の子とは違う生まれ方をしたらしい、それもあまり良くない何か後ろめたい不名誉なものがひそんでいると感じるようになりました。「やはりそうだ」と思える場面も次第に増えてきました。成長するにつれ私は人と接するのが嫌になり、閉じこもって読書にふけることが多くなりました。現実から逃げ出して幻想の世界に浸るのが常で、陰気な子でした。

一方、時代は昭和十年代に入り、第二次世界大戦の戦火が拡大した時期でした。内地の軍事色も日毎に高まり、ついに都市住民を巻き込む空襲までが始まり、危険にさらされるようになりました。一個人の身の悩みなどは、眼前の恐ろしい現実には呑み込まれてしま

います。それまで時々訪れた牛込^{うしご}の父の屋敷へもめったに行けなくなったのは、私にとってはむしろ良いことだったと思います。折しも昭和二十年五月二十三日深夜、大空襲があり、私が住んでいた大森の家もあつという間にすっかり灰になりました。十八歳の私は煤^{すす}だらけで担架をかつぎ走り回りました。自分自身は何の怪^け我もなく、また、数日後に自室の焼け跡を棒でつつきながら、それまでの過去が消えてしまったのを少しも惜しいとは思わず、さばさばした気持ちだったのを覚えています。

やがて、八月十五日に終戦となり、着のみのままでしたが、幸い当時勤めていた海軍の関係で、横浜戸塚の小さな借屋に入ることができました。母と二人だけの生活でした。

ちよつと話しがとびますが、昭和二十二年に専門学校へ進むことになり、その費用を助けてもらうため父と再びつながりが生じました。けれども、じきに疎遠

になりました。それから十年位過ぎた頃でしょうか、ある日、買物の包み紙の古新聞に父の死亡通知があるのを見ました。私は何も知らずにいました。父とはそれが終わりです。

わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。
(イザヤ 45・7)

昭和二十年十一月半^{なか}ばのある午後、私は母と一緒に秋の色濃くなり始めた戸塚の里山の小道を、目的もなく歩いていました。すると、向こうから一人の男性がこちらに歩いて来ながら話しかけてきました。

「この辺で、りんどうの花をさがして、根ごと庭に植えたいのです」。そして少し言葉をかわしてから、再び歩き始める時に言われました。「この先の小屋に住んでいます。通られて喉^{のど}がかわいた時は水を飲みにお寄

りください」。それから何日かのち、また山道を歩いていて雑木林を抜け、一面草の生い茂る中に一軒の山小屋風の家があるのを見たのです。とたんに私は「ああ、こんな所に住みたい」と非常に強い思いにとらえられ、しばらく立ち去りがたく、夕映えの「小屋」を眺めていました。

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしが生じ、彼らを見捨てない。
(イザヤ 42・16)

その頃の私は、イエス様のことも十字架のみわざも何も知りませんでした。

それから何日かたった頃、偶然と呼ぶにはあまりに不思議なことが続きました。その頃勤め始めた農芸研究所で所長さんから頼まれ、サンプルを届けるために

訪れたのが、何とあの小屋だったのです。何となく予想していた通りそこに住む人が、山道で出逢った男性でした。名前も始めて知りました。

私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。…あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。

(詩篇 139・14、16)

この人、竹田清と三年後に結婚しました。主人は終戦直前、北京大学の数学の教授を辞し、長男元(五歳)を連れて、すでにかなりの危険コースだった日本海經由で帰国したとのことです。雨露をしのぐ小屋が無事残っていたのは本当に幸いでした。

私は前述の通り昭和二十二年研究所をやめ、戦時中

のブランクを少しでも補おうと旧制津田塾物理化学科に入学、卒業直前に入籍しました。卒業後はほとんど専業主婦として今日に至っています。ついでながら古びた「小屋」に今も住んでいます。

主人は幼い頃から肺結核を病んできました。当時はまだ特效薬もないままサナトリウムへの入所等により小康を得ていました。しかし実家の人たちとは、どうしても相容れないものがあり、大学卒業後、生家を出て完全に絶縁したそうです。その「非常な資産家」の彼の実家へは私は一度も行ったことはありません。

昭和二十五年、主人と、母親を病気で亡くした元と私と三人の新しい生活が、小屋で始まりました。その後、次男晶、長女百合をさずかりました。主人は殆ど家において、数学の論文をまとめたり思索にふけつたりの日々でした。人の出入りのない静かな時間が多く、彼はよくさまざまの話題で話しをしてくれました。ある

時、人間性に絶望して自殺をはかったことがあったが、発見が早く助けられたと体験を語り、「人は死にたいからといって死ぬるものでもなく、死にたくないからといって死の時がくれば死ななければならない」と申しました。真理の重さが押し入ってくるようなひとときでしたが、にぶい私の心には彼の苦悩への同情があるだけで、それ以上を求めることはないままでした。

神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。(ローマ 9・18)

昭和三十年代に入って日本は復興がすすみ、人々の生活も豊かになっていきました。主人は相変わらず研究に打ち込んでいましたが、いろいろな病気で大学を休むこともよくあり、また入院も度々くり返しました。その病気は持病の肺結核によるもの、他に喘息、十二指腸潰瘍、緑内障で片眼を失明し、障害者に認定され

ました。それでいながら昭和三十九年にモスクワ大学、昭和四十五年にドイツのボン大学、ハンブルグ大学等での講演に出かけることができました。主治医の指示で私はいつも付添いました。召天後残された彼の日誌には、主のお恵みに対する感謝の言葉が連ねてありました。

主人の信仰については出逢った頃から時折聞いていました。その頃教会へは行っていませんでしたが、戦時中の北京で迫害のある中、「私の宗教はプロテスタント」と明らかにしていたとのことでした。私の方はそんな対話のときも、眼前の話題をただ聞き流すだけで救い主には少しも心が向きませんでした。

ただ一つ忘れられないことがありました。昭和二十三年五月、イスラエル建国のニュースを聞いた主人が(その頃、私たちは先生と生徒の間柄でした)「ではまもなく再臨のキリストに、生きていて出会えるか

もしれない。すばらしい時に生まれ合わせたものです」と言ったのです。歳月が過ぎ他のことは忘れたのに、この一言だけは覚えています。「先生は、何で遠い国のことでこんなに感動しているのかしら？」とひそかに思ったものです。

昭和五十年頃、主人の既刊の数学の本で上・中巻に続く下巻の原稿が出来上がった時、出版社から「内容がむずかしすぎて売れる見込みがない」と断られてしまいました。どこの社からもことわれ、主人は「もういいよ。原稿だけは完成したのだから」と静かに言い、分厚いその束を片付けようとなりました。でも私は「彼の個性の表現のような数学」を長年かかってまとめたのを見ていて、気の毒でならず、前後のことも考えないまま、大学の共済の年金積立金を借りて自費出版する方法を提案しました。気乗りしない様子の主人でしたが、計画はすすみ、程なく下巻千冊は仕上がって全

部家に運び込まれました。二階へ運びましたが、やはり少ししか売れなかったもので、今もそのまま積んであります。結局、彼は年金をもらう資格を失いました。

昭和五十一年頃、子供たちは成人してそれぞれの生活に入り、主人と二人で相変わらずの静かな日々をすごしていました。少し過労だったのか私は急に高熱を出し、急性肝炎と診断され三箇月入院しました。面会謝絶の個室で何も喉を通らず、少し朦朧もろろうとしながら私はただ祈るばかりでした。それも絶対的な真理があることは信じていましたが、誰にどのように祈ればよいかわからない私でした。ととのった祈りの言葉もわきまえず、ただひたすら助けを求めていました。弱り切った体でできることはゼロ、たったひとつ残されたのが祈りでした。手厚い治療を受け、ゆつくりと病は回復に向かい始めましたが、両脚の関節に強い痛みが出て、関節リウマチと診断されました。ステロイド剤による治療が始まり退院後さらに免疫抑制剤めんそくせいざいも投

薬され、一時は好転しましたが、結局薬の副作用が強くて、自己判断ですべて薬は止めてしまいました。今、病歴四十数年、何も服薬はなく、時々関節に強い痛みがくる日もあります。それに対応する方法が身についたことを本当に感謝しています。

昭和五十七年、特に病氣にかかってはいなかった主人が私に突然言いました。「(自分は)そんなに長くは生きられないと思っている。その日のために確かな信仰をもちなさい。良い指導者に会えたら洗礼も受けなさい」。それまで私はどんな内容のことでも彼が「しなさい」と言うことには(反撥はんぱつや不満のある時でも)その通り行なっていました。この時は、何も逆らう気持ちがないばかりか、嬉うれしくてホッとする思いに満たされうなずきました。

その頃主人は自宅で数学を教えていたのですが、勉強に来ていた大出尚郎さんを通して、お母様の潤子姉

妹からドイツ人宣教師ベックさんを紹介していただきました。昭和五十八年七月二十九日、初めて私は吉祥寺集会にベックさんを訪ね、二階のお部屋でお会いしました。主人も同行し、ベックさんは私たち二人のために長時間を費やしてくださいました。対話はほとんどドイツ語でした。ベックさんが(私にはもちろん日本語で)聖書を開いてお話しくださっている間中、私はなぜか自分でもわからない涙があふれて止まりませんでした。そして、九月十八日洗礼のお恵みにあずかりました。

それから一年と少し後、昭和六十年六月十二日に主人は天に召されました。ベックさんがこれらのことを「光よあれ8号」に書いてくださいましたので、ここでは省きたいと思います。

神は傷つけるが、それを包み、打ち砕くが、その手でい
やしてくださるからだ。
(三ブ 5・18)

吉祥寺キリスト集会旧会堂での葬儀も兄弟姉妹たちのお祈りの中で、一度もここで礼拝に出たことのない主人でしたのに、心からの感謝をこめてとり行なってくださいました。やもめとなった私に、主の憐れみのみわざはすでに備えられていました。主人在世の頃から生活のため、戸塚区平戸の小さな学習塾で私は働いていたのですが、町内で家庭集會が開かれていたので参加したり、また、のちには祈り会も始まって、形は変わっても今までずっと交流が続いてきたのです。時には夜九時からの兄弟姉妹合同の祈り会もあり、ちょうど塾の終了と時刻が合うので山田健、絹子ご夫妻が往復車を出してください、車中で交わしたお話しがどんなに私のあやうげな信仰を支えてくださったことか。時々兄姉たちの語られる言葉がとても立派で、自分はいじめな落ちこぼれだと沈みこむこともよくありましたが、「安心して行きなさい。」(ルカ7・50)と、イエス様は励ましてくださいました。

幼い日からの「心の傷痕」が残る私は「家族」という一語が成人してからもうにも苦手で、無関心でいようと長い間心を閉ざしてきましたが、今は「神の家族」がイエス様からの大切な贈りものとなっています。そのおひとり、おひとり、この世の交わりからは得られない一致を持つことができるからです。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

(ヨハネ 14・27)

平成元年十二月、突然、孫の純一郎(晶の長男)が「交通事故致死」と急報が入りました。私はショックでその場にぐずおれ倒れてしまいました。頭の中は空っぽ、葬儀の間ずっと「主は与え、主は取られる。主の御名は

ほむべきかな。」(ヨブ1・21)と声には出さず唇を動かしていました。

純一郎が友達にさそわれ教会へ行ったのは聞いていましたが、突然のことに「イエス様、なぜですか」と問いつつ涙にくれていたある時、何の前ぶれもなく眼の前に、荒れ果てた、汚れ切った地上の映像がありありと浮かんだのです。そして純一郎の姿はそのどこにもないのです。その瞬間、イエス様がきよい永遠の世界へと純一郎をお導きくださり、今もともにいてくださり、私も必ず再会できるのだと、嬉しくて有難くて「イエス様有難うございます」と叫んでいました。涙はピタリと止まり、以後一滴も出ていません。あの瞬間の、まるで深い谷底から一挙に高い頂まで引き上げられたような喜びの大きさは筆舌に尽くせません。

今年九十三歳になりました。主イエス様は、この老いの身に何が必要なのかをよくご存じで、見えるもの

も見えないものも豊かにくださっています。ある時私はハッとしました。それまで父のことは主への不従順の「いいわけ」の道具として利用し続けてきたのだと、示されたのです。何と卑怯な私、どうしたらいいのか――、何十年も前に父との関わりは終わり、自分でもこれでいいのだとスイッチを切ったような気持ちでいました。重苦しい何日が続いた後、みことばを頂きました。

わたしの名によって求めることは何でも、それをしましう。
(ヨハネ 14・13)

地上のいのちが終った時、ひとかけらも暗い部分がない中に置かれ、喜びに満ちてイエス様のお近くへ導かれますように、これが切なる願いとなり、祈りとなりました。

7人の証し

Unser HERR lebt

わたしの愛の中にとどまりなさい。(ヨハネ 15・9)

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。…
ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそ
れをことごとく知っておられます。(詩篇 139・1、4)

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてく
ださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての
咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのち
を穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶら
せ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さ
は、わしのように、新しくなる。(詩篇 103・2～5)

貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の
食物で私を養ってください。(箴言 30・8)

竹田 竹子(たけた たけこ)

一九二七年 東京港区生まれ、都立駒場高校卒、津田
塾専門学校(旧制)(現津田塾大学)物理化学科卒

長男 元(はじめ)

次男 晶(あきら)

長女 百合(ゆり)



小さな者に目をとめてくださる主

仙石 真由美



ご家族と、真由美さん(一番左)、隣りは生前の智治さん

私は、一九六一年十二月に愛媛県の離島で生まれました。家は蜜柑農家みかんでした。私は未熟児で父が言うには手のひらにのるくらい小さかったそうです。十二月の寒い日で、助からないと思って心配していたと何度も聞かされました。主は小さい私を生かされました。

私は高校まで島で暮らし、短大進学と同時に大阪に出了ました。

そのまま大阪で就職して印刷会社に入り、そこで今も仲の良い友達ができ、その友人の中に元バックパッカー(大型リュックを背負って世界を旅する人)だった主人もいて、私は一九九四年に主人と結婚しました。翌一九九五年に長男を、一九九七年には長女も授かりました。今振り返ると、この二人の子供たちは、私たち夫婦にとってイエス様と出会うための主からの贈りものだったと思います。

二〇〇〇年、この子供たちが五歳と三歳になった頃、二人には広汎性発達障害こうはんせいふたつたしょうがいという障害があることがわか

りました。この障害は言葉をしゃべらない、落ち着きがない、こだわりやパニックを起こすといった症状、さらに哀かなしいのは、親がそばにいないのを不安に思わないということでした。心の交流が無く、母親なのに求められていない気がしました。

でも目に見える二人はほんとうに可愛かわいくて誰の目にも病気には見えません。私は誰にもわかってもらえない悩みと心配に押しつぶされていました。私の子育てははじめなものでした。私のその頃の日課は、近所の人の誰もいない遠くの公園まで二人をママチャリに乗せて走り、時間をつぶして、暗くなるのを待ちます。そして、夕方になって背中(あし)で眠ってしまった娘と、手を離すと行方不明になる息子の手を握り、空いた手にスーパーで買った物あひさした袋を下げて自宅まで戻り、笑顔でご近所に挨拶しながら玄関に入り、ドアを閉めて、スーパーの袋を投げ出して座り込んで泣き出す、というものでした。何という愚かな人間と思われるでしょう

うが、私は世界中の人から「親のしつけが悪いんじゃないの?」「愛情が足りないんじゃないの?」と言われるている気がしていました。近所の人が集まって談笑しているだけで、自分のことを言われている気がして、青ざめて身がすくみました。

主人は当時仕事が忙しく、居ないのも同然でした。また、たとえ居たとしても私にとっては言葉の通じない異星人のような人で、正直、居ない方が手のかかる人が一人減って助かると思っていました。そんなですから当時の我家はすさみきつていて、私は夕方からキッチンでビールを飲み、換気扇の前にはタバコの吸い殻が山積みでした。

その日も主人が帰って来て私に何か言いましたが、腹を立てる気力も、泣く気力もなくぼーとした感じで「いつそ死んだら楽かしら?」という思いになっていました。同時に「誰でもいい。もし神様がいるなら助

けて」と思いました。そして、「あそこへ行ったらどうだろう?」とふと思ひ浮かんだのが、生駒に住んでおられた主人の友人のクリスチャン、広田さんのお宅でした。

訪ねたのは遅い時間でしたが、ご夫妻はいやな顔をせずにお宅に迎えてくださり、私は奥様に自分の状況を話したのでした。すると突然「祈りましょうか?」と言われました。「祈る……?」私はそれが何かわかりませんでした。広田さんは誰かに向かつて「天のお父様、御子イエス様、この仙石真由美さんが、あなた様からお預かりした英治君と莉彩ちゃんのことです。苦しんでおられます」と言われました。

そしてそれだけで全てが解決しました。なぜかはわかりません。聖書のみことば一つ出てこないじゃないかと思われるかもしれませんが、解決したのです。

主は、いと高き所から御手を伸べて私を捕え、私を大

水から引き上げられた。

(詩篇 18:16)

暗室のカーテンが開いたようでした。子供たちは依然として病気で、私などいてもいいなくてもいいようです。主人とは冷えきったままです。現実は何ひとつ変わっていませんでしたが、確かに私は解決したのを感じました。

私はこの日からみるみる元氣になりました。いただいた聖書や集会のカセットテープが私をどんどん嬉しくしてくれたからです。祈りとともにお酒とタバコも必要でなくなりました。

二〇〇四年に、私は「大阪神戸喜びの集い」でバプテスマを受けました。この時、一度はOKしたはずの主人が、会場だったリバーサイドホテルの玄関で怒り出し、対応してくださった集会の皆さんに大変ご迷惑をおかけしました。しかし、その彼も二〇一〇年に、同じ

「喜びの集い」で同じリバーサイドホテルでバプテスマを受けました。ある時は広田家の地下室の住人だったリ、よっちゃん(高橋義夫さん)の子供集会で一緒にお昼寝担当だったりしていた「あの仙ちゃん(主人の愛称)がバプテスマ?」というので、みんなビックリしたり喜んだりしてくださいました。全てイエスさまの憐れみと皆様のお祈りのおかげだったと思います。

この二〇一〇年は嬉しいことと辛いことのセットの年で、子供たちは学校でひどいイジメを受けていました。特に長男がひどくて、教室から締め出される、トイレに閉じ込められて上からバケツの水をかけられるなど、イジメのオンパレードでした。

一番ショックだったのは学校側がよかれと思って設定してくださった、イジメた側の子供たちの親御さんとの話し合いの席での出来事でした。ほぼクラス全員の親御さんたちに囲まれるのが嫌でたまらないのを祈って出かけた席で、「気持ち悪いんだから仕方ない」

と言われたのです。障害についての説明など聞いてもくれません。耳を疑い怒りがこみあげて、頭が真っ白になりましたが、なぜか言葉が出てきませんでした。悔しくて何か一言報いてやりたいと、言葉を探しましたが出てきません。横に居た主人がその時静かに「それでも、どんな理由があろうとイジメは良くないことでしょう」と言ってくれました。結婚してから初めて、主人と心が通った気がして主に感謝しました。でもうなじのこわい私にとって、このことは長い間トラウマのように私を重苦しい気持ちにしました。回復には時間が必要でした。しかし今ではこのことも最善だったのだと思えます。

しかし、神である主は、私を助ける。それゆえ、私は、侮辱されなかった。それゆえ、私は顔を火打石のように、恥を見てはならないと知った。私を義とする方が近くにおられる。だれが私と争うのか。さあ、さばきの座に

共に立とう。どんな者が、私を訴えるのか。私のところに出て来い。見よ。神である主が、私を助ける。だれが私を罪に定めるのか。見よ。彼らはみな、衣のように古び、しみが彼らを食い尽くす。

(イザヤ 50:7-9)

この頃は、主人自身も取引先から精神的なバワハラにあっていました。いつも一言余計なことを言う人でしたが、この時は私が理由を聞いてもただ「自分が悪かったんだ」と言っていました。ほんとうに辛^ひそうであまりに酷^{ひど}いと思って「そこまで言われるなら仕事やめてもいいよー」と見かねて言いましたが、「この仕事が無くなると困るから」と、頑張っていました。

どんどん鬱^{ふさ}症状が酷くなり、とうとう仕事を失い、自宅に引き込もることが多くなりました。持病のC型肝炎は集会の方の助言で完治しましたが、今度は腎臓に腫瘍が出来て、八割を切除しました。不眠症と睡眠時無呼吸症候群もかかえていて、毎日朝昼晩と、手の

ひらいつばいのお薬を飲んでいました。主人は集会に集い始めて喜んでいたのに、家族での聖書輪読や夜のお祈りも、いつの間になくなっていきました。

一方の私はというと、一人元気でした。当時は特別養護老人ホームでヘルパーとして働いており、仕事に一生懸命でした。主人は辛そうだったのに、私には何の思いやりもありませんでした。家でゴロゴロしている主人は、ただの怠け者にしか見えなかったのです。私は「今こそ主人はイエス様に頼るべきだ」と思っていました。一見正しい考えで、私は、自分は正しく主人はまちがっていると思っていました。

いつの間にかイエス様はそっちのけで、自分が働いて家族を養っていると思いあがっていたのだと思います。けれども、どんどん仕事を増やして夜勤まで始めてしまった結果、私は腰を痛めて、痛み止めを飲んでも立っていられなくなっていました。私はそうであってもまだ痛み止めの量を増やしたり、湿布^{しふ}を貼り

まくって頑張っていました。ただの自己満足と、主人へのあてつけだったのではないかと思います。

というのも、恐ろしいことに私は自分の罪の自覚にフタをすることが出来るらしいのです。意識して無自覚になれるとは、ほんとうにおそろしい者です。しかも毎日イエス様にお祈りしていたのですから。ママチャリで暗闇^{くらやみ}を走っていた頃よりも悪いと思います。

主人は二〇一六年頃には、髪を緑に染めたりピンクに染めたりしているかと思うと、突然、東南アジアに旅行に出かけて二箇月くらい帰ってこなくなりました。もともとバックパッカーで旅慣れていましたので、それほど心配はしていませんでした。最初は一週間前に予告、次には前日に予告、次には当日、最後の方は携帯電話の位置情報を検索したらタイにいるようなこともありました。主人は、冷たくさばく妻から逃げ出していたのかもしれませんが。

私は、口では「イエス様、イエス様」と言いながら少

しもイエス様に頼っていない者でした。主人に寄り添ってあげるべきでしたのに、私は不服で嫌でした。

そして二〇一七年十月一日の朝が来ました。私は午前五時の目覚まし時計で起き上がると、半分冷たくなりかけた主人を自宅の居間で発見しました。長男の英治と私は一九番の交換手の指示で救急車が来るまで、心臓マッサージを行ないました。「イエス様、今日なんですか?」「まさか今なんですか?」「私は心の中で叫んでいました。

主人の父は、この日ちょうど自身の人工胆管の交換手術のために主人が搬送された同じ病院に入院していました。しかも、その前日に義父を車で病院に送ったのは当の本人、主人だったのです。義父は、私の連絡を受けて半信半疑で上の階の病室から降りて来て主人を見ると、「これ、ほんとうに死んだるんか? まだ温かいけど」と言ったり、着ていた術着を脱いで自分で退

院の手続きをしました。

義父は未信者で、常日頃から自分は仙石家の六代目の長男だから仏壇のお守りの責任があると言っていたのに「智治ともしの葬儀は真由美ちゃんのやりたいようにしてくれていい」と言われました。頼んだのも主人と取り決めがあったわけでもありません。まるで奇跡のようでした。まるで何かの力におおわれていたようだったと後になって思いました。

全ての段取りが終わり明日が前夜式という夜、一度自宅に帰った私は真つ暗な部屋の窓を見ながらお祈りしました。私は主を恐れました。私はもう主人に「ごめんなさい」と言うチャンスがありません。和解することもやり直すことも出来ません。取り返しがつきません。主人はどうなったのでしょうか。最後は集会にも礼拝にも出なくなり、全くイエス様から離れてしまっているように私には見えました。それなのにあの義父が長男の集会での葬儀を許してくれています。

「天のお父さん、智治さんはお父さんの所へ行きましたか？ イエス様に会えたですか？ 教えてください。私にわからせてください。」「私はとても赦されないと 생각합니다。でもそれでも不信仰な私を、どうか赦してください。私は天のお父さんに赦してもらえなかったら、イエス様の十字架がなかったら、何の希望もないのです。」「そして「明日の前夜式、イエス様だけが中心となってください」とお祈りしました。

そして葬儀の日、義父は、司会者の方から頼まれた挨拶の中で、本人も知らず知らずにイエス様のすばらしさを証しされました。この前夜式と召天式は、私に再会の喜びだけを残して思いわずらいを消し去ってくれました。

地球の裏側までさまよって行っていたとしても、礼拝に来ていなくても、イエス様は主人を愛してくださっていた、決してその手を離したりされなかったのだと、そう思えました。私はそれを信じました。不信仰

な私もやっと安心して涙がこぼれました。前夜式も召天式も集会の皆さんの祈りと賛美を聞いているうちに、主人が本当に天に引き上げられたんだと思えてきて、主の憐れみとご愛を改めて覚えました。主のご愛は私などの理解をはるかに越えているのだと感謝しました。

しかし二〇一七年はこれで終わりではありませんでした。主人の天国を信じて喜んだのもつかの間、今度はお金の問題が起きました。借金の額は私に返済出来る額を超えていました。困り果てて市の相談窓口で無料の弁護士さんを教えていただき、恥をしのんで相続放棄の手続きを取ることにしましたが、そうすると収入は全て主人の口座に入っていたので、一円もそれが使えない、主人の口座からおろしたのも使えないことがわかりました。たいした額ではなくても全財産なので途方にくれました。また借りたお金を踏み倒すと思うと良心がとがめました。たった数日前にあん

なに喜んでいたのに、私はあつと言う間にまた真つ暗闇に落ち込みました。怖くて怖くて仕方ありませんでした。インターネットも電話も郵便物も通信手段全てが怖くて、パソコンの電源も落としました。インターネットでの集会のメッセージも聞けません。聞けるのは集会の古いCD一枚だけでした。ベック兄の『問題からの逃れ道』というメッセージでした。何度も何度も聞きました。「問題を見ないでイエス様だけを見なさい」とおっしゃっていました。

でもどうして問題を見ないでいられるでしょう。自分が何もせず、対策を考えたり動いたりしなかったら。祈りやみことばは今まで私を明るくしたり前向きにしたりしてくれました。でも、現実問題は解決しないと私は思っていました。ましてや自分たちの作った借金のことを神様に頼るなんてとんでもないと、心のどこかで思っていました。でも怖くて仕方がないのです。借金の督促状とくそくしやうの文面はだんだん怖くなり、脅されている

るようです。ひょっとして住所をたどって家まで来たりしないでしょうか。電話が鳴ってもチャイムが鳴っても怖いのです。私が慌てて愚かなことをしでかすと、弁護士さんと司法書士さんと両方から「お母さんは何もしないで。今あなたは普通の状態ではないんですから」と言われました。私はもう仕方ないから、ためしに何もしないでいようと思いました。

そのかわり聖書のみことばを読んで祈ることにしました。見つけたみことばは、「この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかりと立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。」(2歴代20・17)でした。「私たちのわがままのために出来たお金の問題を、聖なる主の前に持って出ていいのかわかりません。でも助けて欲しいのです。助けてイエス様！私が動かないように、そして怖くないように、足りない信頼を増し加えてください」と祈りました。そして私は祈っているうちに、ほんとうに静かな気持ちになりました。イ

エス様は私が信頼を願った時に、また静かな平安をくだされたのです。イザヤ書30章15節のみことば通りでした。

神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」

(イザヤ 30・15)

目に見えない恐怖は消えました。私は動きまわるのを止めてほんとうにじっとしていました。主人の名で来る督促状は全部、開封しないで破って捨てるか弁護士さんにまとめて送りました。親族全員が協力してくれました。手続きは全て無事終わりました。怖い人は来ませんでした。それどころか主人名義のマンションはスムーズに明け渡しが終わわり、新しく住む府営住宅の抽選にも当たりました。引越しの費用は、一年ほ

ど前にダメもとで申請してすっかり忘れていた所から、一年分まとめて払うという通知が来て、祈ってくださっていた集会の姉妹は「イエス様ありがとう！イエス様すごい」と喜びをわち合ってくださいました。

イエス様は現実問題も、どのような問題とも関係なく解決して見せてくださいました。天国の主人の口ぐせは「お腹が空かないといいのに」で、好きなみことばは、「…かめの粉は尽きず…」(1列王17・14)でした。最後にけんか別れたきりですが、天国で会ったら「あのみことばほんとうだったよー」と言いたいと思います。

「生きることは戦いだよー」とベックさんがおっしゃっていた通り、小さい私は何も出来ないのに、まだまだ生きていないといけないみたいです。でもある日突然その日はやって来ます。その日まで私は決して悟らず理解することもなく役立たずだと思います。で

も気落ちしても思い出すことが出来ます。なんでも出来るすごいお方は、小さなだめな私のことを愛しておられ、決して私を見捨てず、私の永遠の味方なのです。

たとい主があなたがたに、乏しいパンとわずかな水とを賜わっても、あなたの教師はもう隠れることなく、あなたの目はあなたの教師を見続けよう。あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことを聞く。

(イザヤ 30・20・21)

小さくなって悔い改め、いつも天のお父様と御子イエス様を呼び求めて祈る者でいられますように。イエス様をご存知ないお一人お一人にすごいイエス様のことを証し出来ますように。そしてイエス様が早くむかえに来てくださいますように。感謝しつつ。

仙石 真由美（せんごくまゆみ）
浪速短期大学卒業、共栄広告株式会社を経てみどりヘルパーステーション勤務

天国在住の夫 智治（ともじ）
長男 英治（えいじ）
長女 莉彩（りさ）



主は生きておられます

山科 一雄



ご家族と、一雄さん(中央)

たいした努力をしたこともなく、特別な能力もなく、何かを深く考えてもおらず、人生いかに生きるべきかなんて考えることもなかったように思います。思春期のなかったような者が、この年になっても将来に希望を持つことが出来るのは大きな喜びと驚きです。

私の生家は小さな商い^{あきな}をしていまして、裕福ではありません。その店がつぶれてからはそうではなくなりましたが、大学生になっていましたので、夜のアルバイトでまあまあの小遣い^{こづかい}を得て、享樂的に毎日過ごしておりました。そのことで悩んだこともないように思います。勉強についてもやかましく言われることもなく、^{しつけ}躾などもうるさくなく、勝手気ままに生きていたように思います。父親は毎夜遅くまで飲み歩いていて、家族で団らんといった覚えがありませんが、そのことで辛い、父が嫌いだと思ったこともなく、そういうものだと思っていました。ですから、結婚してからも遊び歩く

私に向かつて、夫婦の間を大切にしたいと家内が訴えても、何を怒っているのかわかりませんでした。

結婚しても長く子供が与えられませんでしたので、夫婦で仲良く遊んでいけばいいじゃないかと、スキー、ダイビング、ジープと二人で一緒に行き、こんなに楽しいから妻も楽しいはず、喜んでいいるはずと、どんどんやっていました。後に家内の証しを聞いて自分の的外れさを知ります。家内は「仲よくいつも一緒に遊んでいたけど、そういうものを求めていなかった。もつと心のつながりを求めていた」ということでした。自分が楽しいから妻も楽しいはずと、自分本位そのものでした。

そういう者が父親の病氣、看病をめぐって考えるようになりました。母を早く亡くし（高校生の時）、兄がいたのですが実兄ではなかったので、「父が死んだらこの世の中で一人ぼっちやなあ、嫁さん言うても元は

他人やし」。そんな頃に英会話を習いに行っていたアメリカ人の宣教師さんが「イエス様を受け入れることとは神様の家族になることですよ」と言われた言葉に、そういうものが欲しいと思いました。それがイエス様を信じる一つの動機でした。

また、聖書の中の預言には、この世の終わりがあり、その時に起る様々なことが書かれています。過去のことと当たっているなら先のことも当たるはずと、ちよつと恐くなり、そのことから自分が助かるためにはどうしたらよいかを考えたのです。

自分の罪がわかつて悔い改めるというものではないのです。ですから多くの人の証しを聞いて、自分は本当に救われているのか、大丈夫なのかと心配でした。聖書は読んでいても、物語のようにも思っていましたし、にわかには信じがたい記述も、まあ昔の人たちのことだからと思っていました。

けれども、ある時急に一つ一つが全部神様から私に

宛てられたメッセージだと感じられたのです。このことは、私自身から出た確信ではないと思います。それからは聖書を読むのが楽しみとなったことを覚えています。目に見える悪い行いだけでなく、神様を認めず自分勝手に生きていることが罪の根本であることを示され、日々の生活の中で、自分のいやな所を見せられるようになりました。

肉の行ないは明白であつて、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、めいて、ゆうきよく酩酊遊興…

（ガラテヤ 5:19-21）

これら全てが自分の中にあると認めざるをえません。もともと罪の意識の薄い者です（若い時には冗談半分で警察ぎたになるようなことを平気でやっていました）。そのような者でもイエス様に受け入れられてい

る安心感は何とも言えません。

そのような者が「主は生きておられる」と言えるようになったのは、子供が与えられたことが大きいように思います。結婚して七年間子供がなく、与えられるようにと折り始めると、あるとき家内が「みことばが与えられた」と言い出しました。「わたしは来年の今ごろ…」（創世記17・21）。私はそんなことは初めてでしたので信じられず、「人には言うな」と言いきかせていました。その後、養子縁組の話が持ち上がり、まだ幼い信仰でしたので、自分の考えの中で心が揺れ動いていました。そんな中で、恵みにより、男の子が与えられたのです。

このことを通して神様は、人間一人一人を造られるお方であることを教えられ、そのご真実に触れる体験となりました。子供が与えられたから嬉しいというよりも、イエス様のすばらしさを教えられたことの方が嬉しかったのを覚えています。

7人の証し

Unser Herr lebt

また、仕事を通して教えていただきました。私は農機具を作る会社に勤めています。私が担当していた機械が多く売れた時のことです。御利益宗教じゃないと言われますが、それはそれとして主の恵みとして喜んでいました。ところがその機械を使う時期までに生産が間に合わず、納められないことがわかった時には慌てました。どう考えても不可能です。焦りましたがどうしようありません。家内に電話で愚痴を言いましたら「この前、キリスト集会のメッセージで、どんな時でも上は開いてると言っていたよ」と。私は「上ねえ」。そう言われても主に頼ることのない者です。こんな信仰的でない者にはダメだろうと、なかばあきらめていました。

実は、納品が遅れそうなその地方では、春先に一度大雪が降り農作業が遅れることがあると聞いていました。すると、その雪が降ったんです。けれども一週間程度遅れるだけではまだまだ間に合いません。農家のお

客様も「これが最後の雪だ、助かったな」と冷やかします。「ああ、もうダメや」と思ったら一週間後にまた雪が降りました。「また少し助かったけど今度こそ最後や」と言われます。この後、「最後の雪」が四度も降りました。結局農作業が一箇月近く遅れ、機械は全て納品できました。まさに主は助けてくださいました。

このような成功話をすると御利益じゃないかと思われるが、それよりも主は私の小さな私生活の中にも働いてくださり、全能者だと知るようになったことが私にとっては大きな喜びとなりました。

そのことをある集会に集う方に話しましたら「あなたは困難な時にはまた祈ればいいですね、主は生きておられますから」と言ってくださいました。それから「主は生きておられる」という言葉は、私にとって確かな喜びとなりました。

このような人生を真面目に考えることもなく、楽しいことばかりを求めて生きてきた者にも主は御自身を

現わしてくださり、頼るようになってくださったことを心から感謝しています。

山科一雄（やましなかずお）

一九五一年七月大阪生れ、現在 奈良県生駒市在住

妻 理永子（りえこ）

